

Nara Women's University

昭和62年度 高2選択講座「現代文」のあゆみ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属中・高等学校 公開日: 2010-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷本, 文男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2133

昭和62年度 高二選択講座「現代文」のあゆみ

谷本文男

〔1〕はじめに

昭和62年度において、私が担当した高校二年生の選択講座「現代文」の一年間の授業の記録をまとめるにあたって、まず、生徒の感想を見えることにしたい。私にとっては耳の痛いこともたくさん書いてあって反省の意味もこめてであるが、それよりもこの選択講座「現代文」の性格、彼らにとっての位置づけ等、私が授業として行なった内容の可否はもちろんであるが、問題点が浮き彫りにされているからである。

「現代文」講座選択者12名のうち、6名の感想を次ぎに紹介する。

〔2〕生徒の感想

この講座の感想といわれても、あまりないので書くのは困難である。授業といってもあまり授業らしくなくて、まあ、わりと気楽に受けられたし、面白くないわけではなかったが、国語の力のプラスになったとはあまり思えない。けっこうよかったのは、漢字テストとか本を読んだぐらいだった。でも星新一は、いまひとつだった。いやだったのは新聞づくりで、後半は、ずっと星占いの十二星座を一つ一つ紹介していっておわってしまった。はっきり言って自分でも手抜きだったと思い、反省している。もっと他にも書くことはあったが、あまり他人に自分の考えや趣味等を公表しない主義なので、（と言いつつ、あちこちでばらしてしまっているような気がする）書かなかったわけである。現代文は、テストがないというのは、たいへんよかったが普段の授業は、お遊びに近いという感じがなくはなかった。この一年間、現代文で得たものというのは、あまりに少ないような気がする。何がよかったかとか、言われても先程書いた、定期テストがなく、息抜きができる授業で、あのやっかいな代数・幾何を選択してテストで四苦八苦するよりはよかったけれど、授業で得たものという、あまり思いつかない。似たようなことの繰り返しになるので、もうおわりたいが結局、現代文の講座は数学の嫌いな奴のたまり場だったというだけだった。 (A組 女子)

なぜか現代文をとるはめになって、一年。なにをやってきたのかなあという気もします。テストなかったし楽なことは楽だったけど、別に国語力が養えたって感じはしません。文章書くのが、嫌いで、各班レポートはいつになっても嫌いでした。

漢字のテストは、ちょっとおもしろかったです。今もう一回やったらたぶんできないと思うけど、その時はいろいろ教えてもらったりしながら、変わった読み方とか結構楽しみながらやりました。あと個人的に言うと、「サラダ記念日」とか「極限の民族」とか印象にのこっています。普段あんまり本を読まないからわからなかったんだけど、ちょっと本の面白さとかわかったような気がして、いろんな本読んでみたいなあと思うようになりました。この気持ちだけでおわりそうな気がするのでそうならないことを願います。

でも国語っていうのはやっぱりあんまり好きじゃないんです……。昔から好きじゃなかったから

急に好きになる方が無理だと思うけど12人っていう少ないクラスだったし、授業っていう感じも少なかった気がします。

(A組 女子)

高一の最後に、英ⅡCを取るはずだったのが急キョ、変更して谷本先生を講師とする現代文になった。とにかく、この現代文の授業は、いろんな授業の中で一番予想に反したものであった。なぜなら、授業のようで授業でなかったのである。その現代文の中でも一番印象に残っているのは、芥川さんの小説を読むのを屋上で風に吹かれてしたことだ。こればかりは授業というより、先生と遊んだという感じ。

こんな授業が週に三回もあったのを、僕は誇りに思う。高校生活のあわただしい受験生活にあのような、あせている自分の肩をポンポンとたたいてくれるような授業が一つだけあったことを。(二つもあればどうかと思うが。)

これから僕の進むべき道を考え、確かめ、悩んでみたらまだまだ先は長い、今のところはその道を正しく歩いている自分に気がついた。

一年間の学習が終わったこの時期にもう一度、自分を見直してみたことを書きました。

(B組 男子)

一年間この現代文の授業を受けて、何をしたかということ思い出しても、漢字のテストをして、新聞を書いて、その他……といったような断片的なことしか思い出せず、一年間授業を通して全体的に何か現代文についての大きなこと(知識ではなくて、文の本質的なこと)を修得したという実感がわいてこないのが残念です。

授業に対する不満は山ほどあるけど、今さらここに書いても仕方がないので、今後は、この授業について否定的な考え方をせずに、肯定的に考えて、自分が一年間通して何を修得したかということを見つけ出してゆきたい。

(C組 男子)

英語ⅡCと現代文のどちらを先に選択するか悩んで英語ⅡCをとり、先生にすすめられて現代文をとりなおした。現代文という講座をどうしても作りたいようだったので、変更した。私は現代文が弱く、12人しかいなかったらあてられたら困ると大変不安でした。その反面、これで現代文の読み方も分かるだろうと期待していました。

新聞を書くということはどう役に立つのかと疑問に思い、先生に聞きにいったこともありました。私は今でも「あれでよかったのか」と思っています。確かに文章を書くことは難しいことだと思います。しかし新聞を書いて上手になれるとも思いません。

読書はいつも私が読まないような本を読み、私もいろんな種類の本を読もうという気になりました。これは楽しかったです。

やっぱり小論文を書くようなことをしたり、受験に向けてのこともして欲しかったです。先生の考えている事は私には分かりません。勝手に解釈したりもしましたが、私はこの授業を受けてみて、最初の期待がうらぎられた気分です。

(C組 女子)

この一年間、現代文の授業で何をしたかを思い出してみると、新聞・漢字・小説を読むこと、の3つが頭に浮かぶが、新聞はいまいちのり気でなかったが、まあ、退屈しなかった。漢字は本来、まじめにやったらためになると思うのだが、なんせ量が多くてあまり覚えられなかった。でも漢字は結構おもしろかった。小説はいろいろ読んだ。第二芸術論は本格的な文章で、難解だった。その他、本多勝一や星新一をはじめの方に読んだ古典などを覚えている。一度、童心に戻ったつもりで童話

を読んでみたかった。それと、日本文学は芥川龍之介のをいくつか読んだが、外国文学の短編とか詩とかを読んでみるのも良かったかと思う。何はともあれ、一年間どうもごくろうさまでした。

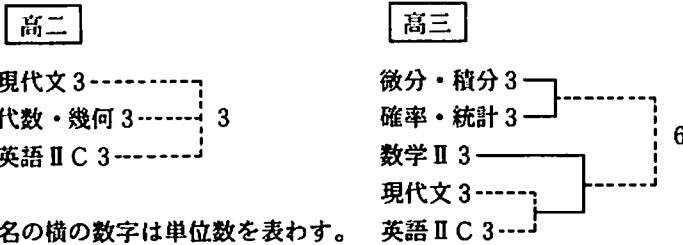
(C組 女子)

生徒なりに一年間を振り返って授業の内容を思いだしたり、不満を述べたり、さまざまなことを書いている。内容についてはあとでまとめたいが、その前に、生徒の感想の中にあった「結局、現代文の講座は、数学の嫌いな奴のたまり場だったというだけだった。」や「英語ⅡCと現代文のどちらを先にするか悩んで英語ⅡCをとり、先生にすすめられて現代文をとりなおした。」ということについて説明しておきたい。

〔3〕本校のカリキュラムと現代文

ここで言う「現代文」とは、もちろん教科としての国語の中にあつて、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「古典」「国語表現」となるが、科目としての「現代文」である。

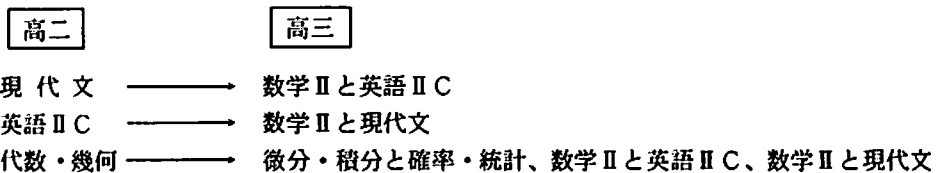
本校では、「現代文」は高二または高三において選択科目として位置づけられている。



科目名の横の数字は単位数を表わす。

-----はいずれか一つの科目を選択することを示す。——は必ず選択することを表わす。

高三で「微分・積分」「確率・統計」を選択するためには高二で「代数・幾何」を選択しておかねばならない。また、高二、高三と続いて「現代文」あるいは「英語ⅡC」を選択することはできない。高二で三科目のうち何を選んだかによって、高三で選択できる科目というのは次のようになっている。



つまり、高二で「代数・幾何」を選べば、高三においては三通りの選択が可能であるが、高二で「現代文」あるいは「英語ⅡC」を選択すると高三で履修する科目が決定されてしまうのである。高二で「代数・幾何」を選択しない生徒にとっては、「現代文」「英語ⅡC」は高二、高三にわたって必ず学習するものであり、そこで問題なのは、どちらを先に選択するかということである。過去4年間の「現代文」「英語ⅡC」両講座の成立状況を示す。

1ないし2の数字は講座数を示す。×は講座不成立を示す。なお、本校における1講座成立のための最低人数は10人である。また、1講座の人数は45人を超えないこととしている。

次の表を見て、次の二つのことが注目される。

- ① 高三において、どの年度も「英語ⅡC」は2講座成立している。

- ② 高二において、「現代文」「英語ⅡC」が両方とも成立したのは昭和62年度がはじめてである。

	62年度	61年度	60年度	59年度
高二 現代文	1	×	1	×
高二 英語ⅡC	1	1	×	×
高三 現代文	1	×	1	1
高三 英語ⅡC	2	2	2	2

以上二つのことから、高二において「現代文」あるいは「英語ⅡC」を選択するものは少数であって、大多数は「代数・幾何」を選択すること、そして高二で「代数・幾何」を選択したもののうち、相当数が「微分・積分」と「確率・統計」を選ばずに、主として「英語ⅡC」に流れていることがわかる。

なぜ、昭和62年度だけ、「現代文」「英語ⅡC」の両方が成立したのだろうか。実は、該当学年の担任の意向が反映されているのである。生徒の感想に「先生にすすめられて現代文をとりなおした。」とあったのは、まさにそのことを指している。

ここで、本校における科目選択のシステムについて略述しておく。

- ① 1月上旬に教務より科目選択について説明。
- ② 説明後1週間程後に科目選択カードを担任に提出。
- ③ 担任はクラスの生徒の科目選択カードを教務に提出。
- ④ 次年度4月に科目選択変更申し出期間をもうける。

以上の①～④がおおまかな科目選択の流れである。昭和61年度の高一の生徒が次年度、高二の履修科目を選択した最初の段階では、「現代文」選択者は一人もいなかったのである。上記の③まで済んで、教務で科目選択一覧表を作成した段階で、担任がその一覧表を見て、動きだしたわけである。教務としては事務的に仕事を進める上ではあまり好ましくないのであるが、担任の強い意向があったので黙認した。教務の担当者は実は私であった。

「英語ⅡC」の選択者の中から10名を超える生徒を「現代文」の方へ移す作業を担任がどのようにして行なったのか詳しくは知らない。一人一人呼んで説得でもしたのであろうか。そもそも「現代文」に変更させる生徒をどのようにして選び出したのかわからない。

ともあれ、担任のすすめに応じて変更する者が10名いて、講座は成立することになった。それに加えて、留学のため休学中の生徒が二名4月から講座に加わることになり、前述のように12名で出発することになった。担任にすすめられて変更した生徒の中には受験に役立つことを期待していたものも当然いるであろうし、わざわざ先生がすすめるのだから何か面白いことがあるのかも知れないと思った生徒がいたかもしれない。「授業に対する不満は山ほどあるけど」「最初の期待が裏切られた思いです。」という感想はそのあたりのことを物語るのかも知れない。

〔4〕週刊「現代文」創刊

とにかく、創刊号の開講のことばと、第2号・第3号を見てほしい。

高二の選択講座「現代文」を担当することになって、一年間どのように進めていこうかまだ模索中であるが、受講者が12名と少ないので、大学におけるゼミのような形式で進めるのを基本とした

い。

そこで、テーマであるが、一口に現代文と言っても非常に間口が広くて漠然としている。それならば担当者の方からテーマを与えるのではなく、こちらからは枠組みを提供して中身は受講者に創造してもらうこととしたい。

具体的には週刊「現代文」なるものを創刊して、受講者にその記者になってもらおうというのが一つである。高二というのは学園祭その他学校行事の中心となる学年であり、また修学旅行もあり、もし「現代文」選択者でそれらの中で何らかの役割を担う者があって「現代文」的に意義のある内容を記事とするのであれば、この週刊「現代文」をそのPRの場として提供してもよいと考えている。

勿論、上に書いたことは一例であって、内容については受講者全員の衆知を結集したいと思っている。

最後に、如何にしても逃れられない問題として評価の問題がある。担当者として、講座の性質上、中間・期末の定期考査においてペーパーテストでは評価しにくいのではないかと考えている。したがって、何を評価の基準とするかということ、普通の授業における取り組みの姿勢、あるいは週刊「現代文」の記者としての記事の出来栄え、その他、小テストの成績等によるものを考えている。

いずれにしても、今焦眉の急となっているのは、週刊「現代文」を軌道に載せることである。記者諸君の健闘を祈る！

〔谷本〕

週刊◇◇現代文◇◇ 第1号 1987年 4月16日



発行所

奈良女子大学文学部附属高等学校
二年「現代文」講座
◎六三〇 奈良市東紀寺町一丁目
六〇番一号
☎ 〇七四二 二六 二五七一

連載計画！

一 班 いちおう予定として海外レポートは全7回になる。各テーマを紹介すると、

- 第一回：天気のことについて
- 第二回：学校生活のこと(1)
- 第三回：学校生活のこと(2)
- 第四回：生活習慣・人について(1)
- 第五回：生活習慣・人について(2)
- 第六回：街の雰囲気のこと
- 第七回：英語のこと

二 班

●二班 テーマ「音楽」
●日本の音楽のルーツについて
一：GSについて(六十年代の音楽界の相に近づく)。

二：続・GSについて
三：一九七〇年代の日本の音楽ーアイドルの誕生

四：現在の日本の音楽
その後未定

三 班
我が学園の野球部を追う我々とし

ては、部員の紹介をはじめ野球部のかくされた魅力をみんなにわかってもらい、ひいては学園全体の雰囲気を感じ上げ、一氣に甲子園へなだれ込もうと行動するものである。であるから、野球部の夏のドラマがつかるまで追い求めるものである。……さあ次の回の週刊「現代文」は、その夏のドラマの主人公達、女子大附属の野球部員の紹介です。

四 班
今のところ、テーマはずっとかえないつもりです。これから、このテーマにそって、その時々季節や、行事、又は日常生活で気付いたこと、話題となつていふことを書いていきたいと思つています。その話によつて、長さは多少異なると思いますが、とにかくみんなにおもしろく読んでもらえるように書きたいと思つています。

下段の漢字読めますか？

28	足袋
27	種児
26	梅雨
25	凸凹
24	伝馬船
23	投網
22	十重二十重
21	親柱
20	名残
19	雷崩
18	祝詞
17	日和
16	吹雪
15	下手
14	土産
13	眼鏡
12	紅葉
11	木綿
10	最寄り
9	八百長
8	浴衣
7	行方
6	お神酒
5	乙女
4	母家
3	神楽
2	河岸
1	蚊帳
0	為替
-1	玄人
-2	早乙女
-3	鱧魚
-4	棧敷
-5	早苗
-6	五月雨
-7	時雨
-8	竹刀
-9	芝生
-10	三味線
-11	数珠
-12	上手
-13	辨人
-14	草履
-15	山車
-16	太刀
-17	七夕

28	足袋
27	種児
26	梅雨
25	凸凹
24	伝馬船
23	投網
22	十重二十重
21	親柱
20	名残
19	雷崩
18	祝詞
17	日和
16	吹雪
15	下手
14	土産
13	眼鏡
12	紅葉
11	木綿
10	最寄り
9	八百長
8	浴衣
7	行方



〔5〕「現代文」の授業と週刊「現代文」

12名という少人数の講座を担当することになってまず考えたことの第一は、少人数であることを生かした小回りのきく内容にしたいということ。第二は、決まったテキストというものは特に用意せずやりたいということ。この二つだけである。それがどうして「週刊「現代文」」を作ることにつながっていくのか、自分でもよく思い出せないが、次の二つのことがおそらくその理由であると思われる。その一つは、なるべく生徒が能動的に参加できるようにしたい。二つめは、授業の一年間の記録を残したい、ということである。

「現代文」の授業は週3時間ある。昭和62年度高2の「現代文」は、月曜日、火曜日、木曜日にあった。それぞれの曜日に次のような内容で行った。

- ① 月曜日……何かまとまりのあるものを読む。結果的にはずいぶん雑多なものになった。
- ② 火曜日……漢字のテスト等、あるいは月曜日の続きを読む。
- ③ 木曜日……生徒の各班によるレポート（記事）の作成。

週刊「現代文」には、③の生徒による記事以外に、①②のこともすべて載せた。①は、読む文章そのものは載せなかったが、生徒の感想等、できるだけ載せた。②の漢字のテストも、週刊「現代文」の内容とした。答えは次号に載せた。1987年4月16日の第1号から1988年3月8日の71号まで発行して終わった。

〔6〕「現代文」の内容・その1 — 各班レポート —

一年間にわたって各班が記事にした内容のあらまし。

- <一班>・留学生の海外レポート（前述の二名の留学帰りの生徒は両方ともこの班になった）
 - ・季節に応じた話題
 - ・音楽のこと
- <二班>・音楽の話題
 - ・高2の生徒の横顔紹介
- <三班>・本校野球部の素顔（この班に野球部の女子マネージャーがいた）
 - ・本校教師のプロフィール
- <四班>・季節の話題
 - ・奈良の「おいしい店」
 - ・星占い

以上の中から、<一班>「留学生の海外レポート」<二班>「音楽の話題」<三班>「本校野球部の素顔」<四班>「星占い」の、それぞれ一部を紹介する。

<一班>「留学生の海外レポート」

日本は日に日に暖かくなっていますが、ここで私がカナダで経験した一番寒い日を紹介합니다。その日は二月中旬、私達は留学生の旅行でカナダの首都オタワでスケートをしていました。オタワ川が凍ってできた10キロ以上に及ぶ世界一長いスケートリンクです。でも風が強くて気温はマイナス40℃近かったということ。鼻の中も凍ってましたっ。

オーストラリアの気候は、日本と正反対です。つまり、今、冬に向かっています。オーストラリアと言っても場所によって異なりますが、私のいた所は、一年中わりと温かかったです。夏は、気温はあまり変わりませんが、空気が乾いていて、動くのもしんどいです。冬は、セーター二枚あれば大丈夫です。雨は、めったに降りません。雪はとんでもない。

というのが今回の海外レポートです。ちょっと短い気もしますが、第一回目なので、ウォーミング・アップ程度で、といったところでしょう。まあ、回を重ねるごとに、内容も充実して行くと思しますので、楽しみにしていってください！

(第5号)

学校生活について

【オーストラリア編】

学校には校則はあんまりないし、あってもほとんど守られてません。1・2時間40分授業で15分間のおやつ時間。3・4・5時間は45分授業です。それが終わると1時間の昼休み。そこから後2時間してやっとお家に帰れます。はっきり言って生徒の態度は最悪。授業中は、本当に遊んでるし、行儀も悪い。学校から体育しに移動する時は、たばこ片手に行くし。何かお腹がちょっとばかし大きい子もいるし。日本だと不良なことも、あっちじゃ当たり前だもん。自由というのか、のんびりしてるというのか……。

【カナダ編】

校風はむちゃ自由。日本に帰ってきて学校って死ぬほどしんどい。私がカナダで一年間通ったハイスクールは5年制で14才から18才までぐらい。制服なし。みんな化粧して車乗って学校くるし。たばこすう。まれですが子供いる人います。授業は日本に比べて簡単だけど授業中みんな真剣で質問もいっぱい。遠足、身体測定、修学旅行なし。夏休みは三ヶ月弱。こんなもんです。1・2ヶ月に1回ぐらいの割合でスクールダンス。体育館をディスコみたいにして11時半ごろまでみんなで踊るの。日本じゃできないよね。

というのが今回の海外レポートです。

これを読んで、まず、外国の学生はハンパやない！行くところまで行っとる！と感じた。いくら風習・習慣の違いはあるとはいえひどい。タバコ片手に学校を歩く！車で通学する！そして、子供がいる奴がおる！外国の先生は何を教えとんねんと言いたくなってくる。まあ、こんな風な大胆な行動をすることで外国の特徴なのかもしれない。ここまで、外国の学生はあまり感心しないみたいにしたが、一ついいなと思うところがあった。それは、学校をディスコにして11時半ぐらいまで踊るということです。時間的には、あまり感心しないけど月に1回、みんなと気楽なふれあいみたいなものがあって良いと思います。こういう面で外国の大胆な行動をしようっていう特徴は良いかもしれませんね！

(第9号)

【カナダ編】

留学して私の性格変わったっていう話もあります。でもむこうではひたすらおとなしい子だったみたいです。特に最初のころ。泣きたいぐらい英語わからなかったし。はじめの1・2ヶ月YES、NO、しか話してなかったんちゃうかな。～してもかまいませんか、と英語で聞かれて自分がよければNO！と答えなければいけないんです。それが私にはどうしてもわからなくて…。やっとわかったのだいぶしてからでした。今考えるとばかだったな。だけどホストの人達苦労しただろうなって思います。感謝いっぱいです。

【オーストラリア編】

着いてすぐは、英語はあんまり分かりませんでした。知ってる単語の数なんて知れてるし、話すのも聞くのも、本当に適当でした。しばらくたったら、普段の会話なんて似た様な物だから、

日がたつ程、楽になりました。でも、帰る頃になって日本語を話すようには、話せないです。時々くやしいこともありました。でも、ケンカもできるようになります。日本で英会話習うくらいだったら、思い切って留学の方が力になります。色々と、勉強になることも楽しいこともあるし。でも帰ってきたら、しんどいことばっかしよ。

(第16号)

今回は特別ゲストのマイケル君に日本についての質問に答えてもらいました。まず留学としてなぜ日本を選んだかという質問です。彼は本当はタイ又は南アフリカに行きたかったということです。それはカナダと違った文化を知りたかったからとか、でもロータリーの留学でそれらの国はだめで日本と決まったそうです。ヨーロッパは行ったことあるしアジアの方へ行きたかったそうです。はじめ日本への留学が決まった時はいやだったみたいですが、だんだん楽しみになって今は大阪の摂津で楽しんでいるようです。

〔マイケルの自己紹介〕

マイケル・コンテです。カナダからです。18さいです。rotary こうかんりゅうがくせい。TINAさんといっしょに日本へきた。摂津高校へいく。日本のかぞくといっしょにすんでいます。日本はたのしいです。

(第25号)

この記事は、文中にあるTINAという女子生徒が本校にカナダから留学して来ていて、その友人のマイケル君が私の授業にとび入り参加したときのものである。

<二班>「音楽の話題」

◎ 1970年代の日本の音について— ようやく、この頃からアイドルと呼ばれる人物が登場してくる。アイドルの年齢の相場といえ、当時は20前後だった。歌唱力も今のアイドルのようではなく、かなりうまかった。服装は派手で、みんな同じ格好をしていた。

当時、人気のあったアイドルに、「ザ・ピーナッツ」がいた。歌が上手だったし双子という事で話題性もあった。他には「ピンキーとキラーズ」。「恋の季節」でヒットした。あと、「ジャーニーズ」、「フォーリーブス」、「フィンガー5」、「ずうとるび」等がいた。

余談だが、フォーリーブスにいたおりも政夫氏は、今は「アイドル水泳大会」の司会をやり、ずうとるびの山田たかお氏は、某番組「笑点」の座布団はこびをやっている……。山しよは小つぶでひりりとからい。

話は戻るが、これらと同時に「御三家」と言われる人達が出てきた。御三家とは「郷ひろみ、西城秀樹、野口五郎」の三人である。今の音楽は、アイドルの人気が高いが、そのルーツは1970年代にある。今の音楽は彼らなしではありえなかっただろう。

☆今週の推薦曲

ラ・イスラ・ボニータ

マドンナ

LP「トゥルー・ブルー」の中からの5曲目のシングル。スペイン調の曲で、地味だけど異国の情緒が漂っていて、私はマドンナの曲では一番好きです。もうすぐマドンナが来日しますが、この一曲を聞くためだけにコンサートに行きたいと思っている私です。

(第9号)

現在の音楽のチャートには必ずといっていい程、アイドル歌手が入っている。オーディションに受かれればすぐに芸能界入りして歌手デビューするケースが多い。中には、たまたまスカウトされて……なんて人もいる。この人達の何人かが、本当に歌手になりたかったのだろうか？ 日本の音楽界の裏側には、無数のバンドがひしめいている。ライブハウスで地道な活動を行いながら、自分達の音ってやつを追求している……世界一を夢見て。

このような芸能界に引き裂くように出現したのは、あの「おニャン子クラブ」である。これを支持している須藤氏にお話をうかがってみた。

「昭和60年9月、柴田君が、『おニャン子クラブ』と叫んでいました。

僕は、その年の夏に初めて『おニャン子クラブ』を見たんですが、偏差値60以上の娘がいっぱい。ほんで団体になって『セーラー服……』などという歌を歌っている。でも、その娘達を好きだなんて言ったら恥だと思い『お前アホか』と言ってました。

しかし、後に、柴田君の時代先取り、最先端流行感覚に感心して『師匠』と呼ぶようになるとは、夢にも思いませんでした。

なぜあのようなブームになったのか。（下段参照）

結局、おニャン子ブームというのは、世間の男たちのハーレム願望を満たすための代償きせいにより、なりたっていたものなのです。

その男たちは、歌を聞くことにより、まるでおニャン子に囲まれているよう想像し、YAPPYな気分になっていたのです。やはり、団体と普通ぼさが一番の魅力だったのでしょう。」

このようなグループの出現に社会の男共の鼻の下はゆるんだのである。現代の音楽、それは、聞かせる歌手から見せる歌手に変わってきたのである。そして我々、二班は予告する。もう一度、バンド・グループサウンズなどの聞かせる音がやって来ると。 <完>

次週は、心機一転でスタートするはずです。

① あれだけたくさんのかわいい子 → 個人的に好きな子ができる。

② かざりけがなくてまるで → たくさんのかわいい女の子が
一つのクラスみたい → 身近に感じる

夕やけニャンニャン
③ 毎日放送 うら番組 → 毎日会える → ハーレム
は再放送

その他 プラスα
TV番組づくり等

D. S.
(ダル・セーニョ)
(第16号)

<三班>「本校野球部の素顔」

20連敗にそろそろ手が届くだろう我が奈良女子大附属高等学校野球部。彼らのみなぎるパワーもこれで終わりかと思われた…が、しかし！

5月3日、憲法記念日、空はあいにくの荒れ模様。彼らの行く末を暗示しているかのようだ。中止と思われたが、1時5分、アンパイアーのプレーボールの合図が宣告された。

一回裏、3番 キャッチャー 多田が痛烈なセンター前ヒットをはなち、続く日浦もレフト前ヒット、そして5番松村が左中間になんと二塁打を打ち一気に2点をはじき出した。そうなればもうこっちのものだ。二回に2点、五回に1点をもぎとり、九回の表に2点を取られたものの5対3のX勝ち、今年初めての勝利を得た。ここに彼らの努力がみのったのだ。さあ、彼らの甲子園へのドラマが一層胸熱くくりひろげられるだろう。彼らのこれからの活躍に注目したい。

(第13号)

市体優勝、インターハイ県予選団体優勝その他もろもろの賞状とメダル……それはもちろん野球部の記録ではない。

今回から、インターハイに向けて獅子奮迅と躍進している硬式テニス部にスポットをあてることにしたいが、決して野球部を見捨てたわけではない。……とにかく今回はテニス部だ！

……今、何と言っても花形はテニスだ。それが、うまいときているから我が学園テニス部、もてること間違いなし。

高三、玉永・加治、高二、中村・原田・岡田。彼らは、八月に奈良県代表として北海道へたつ。

彼らはきっとやるだろう。いや、必ずやりとげてみせる。彼らの未来は明るい。その燦然と輝く光に、目がつぶれそうな、野球部の応援歌をのせる。みんなもはやく覚えて応援しよう！

(第27号)

7月2日、運命の抽選日。この抽選がうまくいけば、我が野球部の最終目的である甲子園出場も夢ではない。

主将日浦大輔のふるえる手が抽選箱に伸びた。かたずを飲んで見守る部長だが、あのスマイルは絶やさない。

くじを引いた。第1回戦の敵は、奈良工業高等専門学校、強いとも弱いとも形容しきれぬ謎めいたチームだ。しかし、過去一度練習試合をし、我が野球部が惨敗したという苦い経験がある。何としても、あの屈辱をはらすべく、次回は勝利したい。その試合は、7月22日、市営郡山球場、第二試合だ。

みんな、応援に行こう！ 前売券はマネージャーへ。おっと、それから応援団とチアガールになりたい人も……。

(第36号)

<四班>「星占い」

今回で、ちょうどラストの魚座(2/19~3/20生まれ)です。魚座の人は、順応性に富んだやさしい性格で幻想的なものや、神秘的なものに強い興味を示す傾向があります。そしてこの星座の人は、内面に二面性をひめています。それは、神性と魔性の両面といえるでしょう。そのはざまをゆれ動いているのが魚座生まれの心情ということが出来ます。この星座の人は、本当は喜怒哀楽の落差が激しいのですが、それを顔に現さないという傾向があります。ですから、表情から内面の心の動きを読み取るのが難しいひとです。それは、努めて感情をおし殺しているというよりは、その内部に夢幻的なもの、不透明な要素を秘めているからです。しかし、しばしば、空想の世界におぼれてしまうこともあり、また、決断力に欠ける面もあります。これらのことは注意すべきことでしょう。

これで12星座全て終わったわけですが、みなさん、どうでしたか。当たっている所が少しはあ

ったでしょうか。まあ、占いが、すべてではありませんから、全然当たってなくてもおかしくはないと思います。信じるのも信じないのも好きすぎだと思うので、参考になれば幸いです。

(第69号)

〔7〕「現代文」の内容・その2 — 一年間に12名+1名(谷本)で読んだもの —

一年の間に様々なものを読んだ。一定の方針にしたがって選んだものではなく、生徒の要望によって選んだものもあるが、私の好みによるところが大きかったかも知れない。「サラダ記念日」などは、教師がうれしがっていたと言われても仕方がない面もある。しかし、芥川や、「アラビア遊牧民」(後で本校に藤木高嶺氏が講演に来られた。本講座で読んでいるときには予期しなかったことである。)など、まともなものも読んだのである。確か、「アラビア遊牧民」は、ある社の中学の教科書に一部が載っていたと記憶している。

いささか読みっぱなしの感がないこともなかった。読んだものについてみんなの意見を聞いて議論をするという点は不十分であったことを認めざるを得ない。あるいは私一人が好きなきことをしゃべっていたこともあったかもしれない。この点では、生徒が主体的に授業に参加する姿勢を引き出せなかったことを反省しなければならないだろう。

読んだものを順に挙げる。

・文庫日記(田辺聖子)より

「額田女王の恋」「むかしはものを」「あつもり」「北浜の米市」「少女と物語」

「あね・おとうと」

・第二芸術論(桑原武夫)

・サラダ記念日(俵万智)より「八月の朝」

・アラビア遊牧民(本多勝一)より

「親切で慎み深いベドウィンの正体」「ベドウィンの方が普遍的で、日本人こそ特殊なのだ」

・芥川龍之介の「藪の中」「芋粥」

・星新一の「ツキ計画」「生活維持省」「診断」「意気投合」「鏡」「冬の蝶」

・ハニホヘト音楽説法(岩城宏之)より「音楽教育はこれでよいのか」

・岩城宏之のからむこらむ(岩城宏之)より

「夏はやっぱり甲子園」「身勝手な嫌煙権運動」「もやしだらけになる日本が心配だ」

「カーレース事故の奇妙な報道」

この中から「第二芸術論」と「サラダ記念日」について、生徒と一緒にどのように読んでいったかを紹介しておく。

<「第二芸術論」を読む>

桑原武夫氏のこの論については、私は高校生のときからその存在は知っていたが、読んだのは大学生になってからであった。驚いた、というのが第一印象であった。一体何に驚いたのかは、本当のところは今だによくわからない。内容もさることながら、「こんなことを堂々と言っている人がいる。」というのが、おそらくそのときの私の気持ちに近いであろう。以来、私の現代俳句に対する考えというものは、桑原武夫氏の呪詛の言葉から逃れられない。それならば、徹底的に桑原氏に平伏する形で生徒を扇動してやれというのが、私の考えであった。そのアジェンダの文章を二つ書いた。

第三回 俳句を論ず

終戦直後に桑原武夫氏の書いたこの文章は、当時かなりの衝撃を与えたはずであるが、その後四十年以上たつて現在俳句はどういう状況にあるか、残念ながらほとんど改訂されていまいと百つてよい。もう一度、桑原氏のこの文章を世の中に知らしめる必要がある。ただ、私が一つ気になる点がある。それは、桑原氏がさかんに西洋、それもフランスと比較される点である。桑原氏はフランス文学者であるから、当然といえば当然なのであるが、こういう態度は実は俳人の反発を招くのではないかと思われる。おそらくフランス文学に通曉した俳人というのはいさゝかまれであろう。したがって俳人はどういふ態度をとるかと言へば、いよいよかたくなに自分の殻にとじこめることになるのである。他人の批判を仰ぐと受け流すのは、得意な不誠実な態度ではなからうか、いわれ

のない言いがかりをつけられているのなるともかく、正当な批判と思われぬものには責任を当てるべきである。照殺すべきではない、誠に遺憾ながらすれ違いに終わっていると訂わざるを得ない。

さて、我々は俳句についてどのような態度をとるべきであろうか。桑原氏の言うように第二芸術と認め、それならばよしとすればいいのか。ただし、氏の論をみると、氏は突極的には俳句を排撃する立場のようであるから、そこまで氏に与するか。私としては、いかんせんそこまでは無理ではないかと思つてゐる。氏の議論は吾うなれば所詮インテリの議論であり、悲しいかな日本ではインテリというものは散して遠ざけられる気味があるのだ。やんぬるかな！



第三回 俳句を論ず

俳句は、作品自体(句一つ)では優劣を定め難い。他の芸術、例えば小説や彫刻では絶対にかつこうことではない。また、俳人は、俳句仲間以外の者の批評を極端にきらう傾向がある。以上の二点は俳句の弱点を余すところなく露呈している。

俳句の世評を決定するのは作品ではなく、それぞれの俳句雑誌に拠る者の勢力の多寡である。それは中世戦人組合的な発露である。

吾うまでもなく、芸術の価値を決定するものは作品自体の評価によらねばならない。しかるに、以上述べてきたことからわかるように、俳句の最近代性は明らかである。桑原氏の言は終戦後すぐのものであるが、ここで、現代の俳句についてはどうであろうか。精細に調査したわけではないが、基本的にはかわりがなからうと思われ、日本の大新聞のいづれにも、読者のための俳句欄(短歌欄もある)があつて、選者と呼ば

れる俳人が膨大な投句作品を選ぶということがあるが、新聞に投句する人は一体何なのだ。新聞に投句する人は我術家予備軍か？ 斯くてそんなことはない。投句する人は、四人ほどの選者のうち、自分で誰に句を読んでもらいたいかを指定することになつてゐる。私は一体どういふ理由によつてそんなことが行われているのか理解できなかつた。が、第二芸術論を読んで理解できた。要するに俳句を作る者は群れて発露を作りたがるのだ。こういう体質はそう簡単に変わるものではない。これでは、若い才能が俳句を目標とすることはできない。俳句の命脈はもはや尽きてゐる。



さらに、次のようなことも行った。

『現代文』講座の俳句作品

まず、氏が本誌の中で試みている、十五句の俳句を専門家の十句と素人の五句に分ける作業を十二名にやってもらった。十五句は次の通り。

- 1 初緑の吾を廻りていづこにか
- 2 咲くむかと大きな幹を撫でながら
- 3 咲くとポクリッとペイトヴェンひびく朝
- 4 羽根のおぼつかなしや花の山
- 5 夕浪の刻みそめたる夕顔し
- 6 鯛鮫やうわりの上の淡路島
- 7 愛に寝てみましたといふ山吹生けてあるに泊り
- 8 柔床むやつめたき風の日につつく
- 9 鞍鞍の夜のあけしらむ天の川
- 10 椅子に在り冬日は置えて近づき来
- 11 願立して魚度の菱に雨風其き
- 12 唄りや風少しある峠道
- 13 防風のここ込砂に埋もれしと
- 14 大掛斐の川面を打ちて水雨かな
- 15 待干して今日の独り居寝もなし

素人…… 2 6 9 12 14
 素人…… 1 3 4 5 7 8 10 11 13 15

十五句のうち無作為に選んで五句のうち素人の句が何句入るかという種中を教習室の首田信也先生に聞きました。

0 …… 0.084 1 …… 0.35 2 …… 0.4 3 …… 0.15
 4 …… 0.017 5 …… 0.0003

結果を示す、
 誰が何句あてたか
 ということは秘術で
 ある。

一句 …… 5名
 二句 …… 6名
 三句 …… 1名

2 …… 3名
 6 …… 1名
 9 …… 7名
 12 …… 7名
 14 …… 2名

『現代文』講座の俳句作品

- 1 春風の香にさそわれて道草す
- 2 中庭の花咲きふくれる後しようかな
- 3 字紙のふんいききたよう女子大さ
- 4 高い空そよかぜ吹いてああすすしい
- 5 初夏の陽と木の葉ゆらめく窓の外
- 6 教員車ケガ人のせてビーポービーポー
- 7 そよ風になむ気さそわる授業中
- 8 サングラスかけた夏のスコアつけ
- 9 夕日みてああ青春がしてみた
- 10 鹿がいるかくしかじか鹿が鹿が鹿が
- 11 しかたなくしかじかそこには鹿が鹿が
- 12 吹く風に香るうづぎの白い花
- 13 風をきりつぼめが空を飛んでいく
- 14 風薫る若木の下に鹿生まる
- 15 奈良の香積所歩道を渡る鹿
- 16 そよそよと吹く風を食べており
- 17 教室に暖気さまのベルびびく
- 18 曇天に暖気に肌をそむけたり
- 19 曇天の薄日に肌をそむけたり
- 20 Gミ指に頬むらがりて夏は来ぬ
- 21 大綱の足をちぎって鱗にやり
- 22 桜木の花散り果てて毛虫居り
- 23 桜葉に糸引きゆれる毛虫かな

「第二森雨論」では、素人の俳句を素人と並べているのだから、我々の俳句だって堂々と発表してやれ、ひよつとすると、素人と見間違えるくらいの出来になるかもしれない。

全員に作ってもらったのだが、中には「わたしできないう」と強情に言いつて作らない人もいた。

また、中には、沢山作つたのだが、その中の幾つかは絶対に見せないで下さいという人もいた。逆に、素人は何も言っていないが、やや強当を欠くものがあつて、観ていないのが、二句ある。

私のアジテーションが成功したかどうか、生徒の意見を紹介してしめくくる。私のように桑原氏に全面降伏というのではなく、結構自分なりの考えがあるようである。

大家の作った俳句にせよ私自身にその意味、言いたいことがわからなければ無意味かなあって気がします。もしかしたら俳句は小説と同じくらい奥深さがあるのかもしれませんが、それは俳句をやっている人にしかわからないのでしょうか。どちらにせよ全然俳句に興味のなかった私が少し興味を覚えたのは、去年の今ごろでした。留学生の高校の英語の授業で俳句をやったんです。もちろん英語です。単語を五・七・五で計17語並べてつくるので日本の俳句よりは長いんですけど、ああ英語でももあるんだなあって少し感動したのを覚えています。

俳諧、俳句についてむつかしいことはわかりませんが、一つの芸術として愛好者が俳句をつくり披露し合うのはそれが素人じみてても趣味として楽しいことかもしれません。俳句の雑誌がたくさん出されているのもそのあらわれだと思います。

もう一つ思うのは第二芸術にもありましたがその俳人個人のことを知っていて俳句がわかるんじゃないかなということですね。考えてることと知っていることを17字の中に表すためにその裏が必要なんじゃないかなと思います。今まで俳句のことについてくわしく考えたことはありませんでしたが、第二芸術を読んでみてむつかしかったながらも、少し良さも悪さもわかったような気がします。

(A組 女子)

第二芸術 — いったい芸術というものに、第一も第二もあるのだろうか。著者は、俳諧という一種独特な日本的な世界をとりあげている。同好者だけがかたをよせあって特殊世界を作り、その中で楽しむ芸事。その世界でしか通用しない言葉の解釈。

もちろん私も俳句が芸術などとは思わない。むしろ著者が言うように、一つの芸事であると思う。しかしそれを、しいて芸術という名を使って「第二芸術」と呼んでいいとは思わない。

私は、芸術というものは、絵画、彫刻なら一瞬目にして、心をうつものをそれと考える。また、小説、映画なら、読み終わった時、見終わった時に心が感動でうちふるえるものだと考える。そういった中で、やはり芸術に第一も第二もないと思うわけである。

俳句というものが、かつての芭蕉のころの第一芸術から現代第二芸術に成り下がっているなどと言う必要もなく、俳句ははじめから、芸事として始まったのだから、その道を歩むべきだと思う。だから現代俳句が、著者の考えにそぐわなくてもいいのだ。現に著者がこの声明をしてから今日、俳句の体系に変化が見られたとは思わない。つまり、時がたっても一度芸術として生まれたものは、変わらないが、芸事、趣味といったものは人々の要求する、その時の社会が要求するものにに応じて変化していくものだ。その変化は、第一芸術が第二芸術に成り下がったものでもなく、変化は変化として受け入れるべきだと思う。

私は、この第二芸術という趣が気に入らなかったのだが、その著者が、「蛇足」というのだから、今回は蛇足として聞きながすことにしてやる。

(B組 男子)

ぼくは、この「第二芸術」で著者のいいたい事（つまり、現代俳句は、ヨーロッパの近代芸術より劣る — 第二芸術である）には、賛成できない。そもそも、俳句とヨーロッパの近代芸術とを比べるのが誤りである。ヨーロッパと日本の間には、いろいろな点（文化、習慣）で相違があ

り、芸術に対する考え方、取り組み方には違いがでてくるのは当然のことである。だから、日本における「芸術」の定義と、ヨーロッパにおける「芸術」の定義は異なるのである。それを作者はフランス文学者という立場からだろうが、芸術に対する意識をヨーロッパにおける「芸術」の定義で統一しようとしている。これは、明らかにおかしいと思う。例をあげると、ボクシングと相撲はどちらが真の格闘技か？ということを義論するのと同じであって、ぼくにしてみれば、この文章に書いてあることはばかばかしい。

まあ、日頃、「芸術」というものに関してあまり関心がないのでこういうふうにするのかも知れない。

結局ぼくのいいたい事は、自分にとって俳句にしても近代芸術にしても、それぞれの「芸術」における定義の中で芸術を理解している人々しかわからないもので、自分には無縁であるように思う。これは、現代俳句と近代芸術にかぎらず「芸術」一般にいえることである。

芸術のわからない立場（今の自分の立場）からこの議論を客観的に見ても、当たり前のことであるが、芸術に対して優劣をつけるのは不可能である。

(C組 男子)

<「サラダ記念日」を読む>

実は、第二芸術論についての意見の中で、ある女生徒が「ついでに言うと、俵万智という人が出した『サラダ記念日』という本の短歌は、『なんやねん』と思うような内容でした。」と書いていた。この生徒は明らかに俵万智の歌に対して反感を持っているように思われた。私は、『サラダ記念日』を読んで非常に面白がり、何人かの生徒に「面白いから読め」といっては、無理やり読ませていた。私が面白いと思うものを彼女はなぜ嫌いなのだろうか、結局は好き嫌いの問題で、説明なんてできないのだろうけれど、わざわざ言及していることに興味を持った。彼女の反応はさわやかであると感じた。新聞紙上で、夫が教師であるという女性が、俵万智に共感を示しながらも、最後に「生徒のことを歌ってほしい」と言っているのを見て感じた不快感と比べると、非常に爽快である。俵万智さん、お願いですから生徒のことを歌うのはやめて下さい。

「八月の朝」から好きな歌を選んで鑑賞文を書き、その歌のパロディーを作ってみた。

ハンバーガーショップの席を立ち上がるように男を捨ててしまおう (八月の朝)

彼女は、もう別れを彼から言われるのは時間のもんだいだと気付いていて、それならば、私から別れよう最後くらいプライドを持つとうと思っている歌であると思う。

きっと、彼から別れを言われるとあきらめられない、だから自分から……というような心を表現していると思う。

☆真夜中に留守番電話流れるは聞きなれた声君のさよなら (B組 女子)

ハンバーガー屋は、腹が減ったから入る時もあるけど、時間つぶしに入る所だと考える。

そして、食べるのが終わって、(つまり、この人にとっては、愛することが終わって) いなきゃならない時間が来たから出ていく様にあっさりとした感じで、あなたとは別れるのよって言いたいけれども、実際はそんなんじゃないなくて、私の気持ちも、もっとわかって欲しかったっていう意味が込められている？

☆君つかむ時がなかなかつかめずにクルクルずしのいくらはすぎる (B組 男子)

気がつけば君の始める花模様ばかり手にしている試着室 (八月の朝)
ふと気がつくと、彼の好きな花模様の服ばかり試着している。彼に少しでも気にしてもらおうというけなげな女の子の様子を素直に歌にしています。
☆花ガラの服を着ている君のかけ今日はなんだか光って見える (A組 女子)

寄せ返す波のしぐさの優しさにいつ言われてもいいさよなら (八月の朝)
別にこの歌が好きで返歌をしたのではないけど、適当にかきやすそうだったからかいただけです。だから鑑賞文もべつにかくことはありません。波の優しさを感じ、相手の冷たさを感じざるを得なくなって、不安でいっぱいなのだろう……ということ位です。「サラダ記念日」が、芸術なら、第三芸術論がかけそうです。
☆さよならは優し海辺はさみしすぎいい加減な町がお似合い (C組 女子)

この時間君の不在を告げるベルどこで飲んで誰と酔ってる (八月の朝)
この歌を選んだのに、特別な意味はありません。でも、この歌には、女の人の気持ちが表れてると思います。いつもこの時間に電話しても彼がいなくて、回数が重なっていく度に、他に彼女がいるんじゃないか——って思う。さりげないしつがかわいいと思います。
☆この次に君が電話をくれる時居留守を使って君をあせらす (C組 女子)

☆印は生徒の作ったパロディーである。

なお、「サラダ記念日」をやっている時に、ちょうど教育実習生が二名参観に来ていて、俵万智の歌について、「自分を客観視している。」「自分の気持ちを代弁してくれているような気がする。」という感想をもらしていた。おそらく後者の感想が、俵万智の歌が世に受け入れられた最大の理由を言い当てていると思われる。

〔8〕「現代文」の内容・その3 — 漢字のテスト —

ややクイズ的な内容に傾いた。動植物の名・古語・四字熟語・熟字訓・紛らわしい漢字等、手当たり次第にやった。形式としては、書取、誤字訂正、読み等である。厳密な意味でのテストではなく、相談してもいいことにした。ワイワイ言いながら結構楽しくやれたと思っている。授業の最後に答えを言って、各人何問正答したかを自己申告させた。問題によって差はあったが、おおよそ六割程度の正答率であったろうか。一般教養国語部門という趣であった。(P 46、P 47参照。)

〔9〕おわりに

さしたる指針もないまま出発して大きな破綻もきたさなかったのは、12名という少人数講座のおかげである。私なりに苦勞もあった。「困った時の教科書」という言葉がしみじみと感じられたこともある。小規模校であるが故の宿命…教材の数が多いこと…を恨めしく思ったこともある。本年度の私の場合四種類あった。また、時間割の関係で、ある生徒にとっては2時間連続私の授業ということが週に1回あった。つまり、クラス単位の授業の次が現代文の授業というわけである。

私にとっては試行錯誤の授業で、教師の側にとってみればこれからもこの仕事をしていく上で得るところが大きかったのだが、生徒にとってはどうだろうか。高二の「現代文」の授業というものは彼らにとって一生に一回限りのものである。その意味で、一学期の中間テストが終わった頃に何人かの生徒が私のところへやってきて、授業に対する不満を直接もらったことは記憶にとどめてお

かねばならない。私が「現代文」の授業でやろうとしていたこととややズレがあって、その不満を十分解消したとはとても言えないからである。

6月16日

発行所

三井物産株式会社
東京市本町二丁目一
番一〇〇号

代文学
〇代文学
〇代文学

23	胸圧を下げ	()	買
22	胸圧を下げる	()	買
21	胸圧を下げる	()	買
20	胸圧を下げる	()	買
19	胸圧を下げる	()	買
18	胸圧を下げる	()	買
17	胸圧を下げる	()	買
16	胸圧を下げる	()	買
15	胸圧を下げる	()	買
14	胸圧を下げる	()	買
13	胸圧を下げる	()	買
12	胸圧を下げる	()	買
11	胸圧を下げる	()	買
10	胸圧を下げる	()	買
9	胸圧を下げる	()	買
8	胸圧を下げる	()	買
7	胸圧を下げる	()	買
6	胸圧を下げる	()	買
5	胸圧を下げる	()	買
4	胸圧を下げる	()	買
3	胸圧を下げる	()	買
2	胸圧を下げる	()	買
1	胸圧を下げる	()	買

76	胸圧を下げる	()	買
75	胸圧を下げる	()	買
74	胸圧を下げる	()	買
73	胸圧を下げる	()	買
72	胸圧を下げる	()	買
71	胸圧を下げる	()	買
70	胸圧を下げる	()	買
69	胸圧を下げる	()	買
68	胸圧を下げる	()	買
67	胸圧を下げる	()	買
66	胸圧を下げる	()	買
65	胸圧を下げる	()	買
64	胸圧を下げる	()	買
63	胸圧を下げる	()	買
62	胸圧を下げる	()	買
61	胸圧を下げる	()	買
60	胸圧を下げる	()	買
59	胸圧を下げる	()	買
58	胸圧を下げる	()	買
57	胸圧を下げる	()	買
56	胸圧を下げる	()	買
55	胸圧を下げる	()	買
54	胸圧を下げる	()	買
53	胸圧を下げる	()	買
52	胸圧を下げる	()	買
51	胸圧を下げる	()	買
50	胸圧を下げる	()	買
49	胸圧を下げる	()	買
48	胸圧を下げる	()	買
47	胸圧を下げる	()	買



